

令和6年度企画展・新紙幣発行記念

銭は天下の 回りもの

令和6年

令和6年

7月9日（火）～9月23日（月）

会場／大分県立埋蔵文化財センター企画展示室

主催：大分県立埋蔵文化財センター

後援：大分合同新聞社、NHK大分放送局、OBS大分放送、
TOSテレビ大分、OAB大分朝日放送

協力：大分県立歴史博物館、大分市教育委員会、
佐伯市教育委員会、竹田市教育委員会、
中津市教育委員会、豊後大野市教育委員会



大分県立埋蔵文化財センター (OPCAR)
Oita Prefectural Center for Archaeological Research

オブカル



〒870-0152 大分県大分市牧緑町1-61

TEL 097-552-0077

FAX 097-552-0700

<https://www.pref.oita.jp/site/maizobunka/>

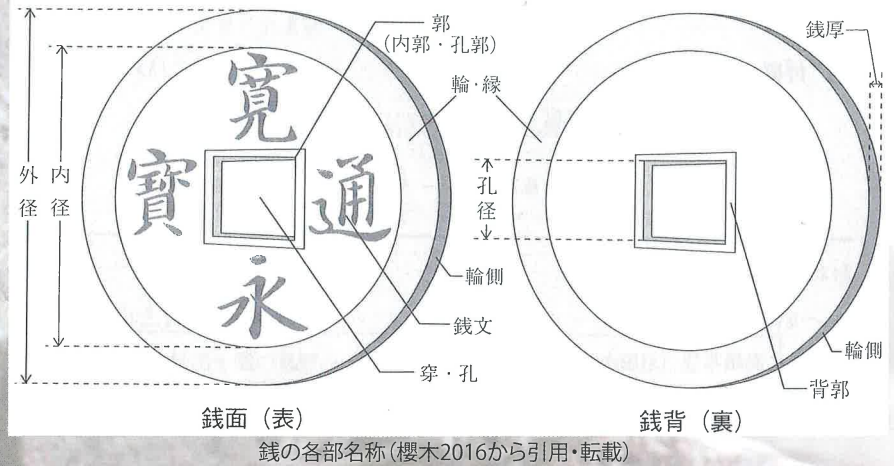
はじめに

令和6年7月に新紙幣が発行されました。本企画展では、新紙幣発行を記念し、古代から近世にかけて流通した「銭」をテーマに取り上げます。

日本では、7世紀後半に銭の铸造が始まり、10世紀中頃には一度途絶えますが、中世には中国大陸から多量の銭がもたらされ、都市部を中心に、活発な経済活動が行われました。近世に入ると寛永通寶等の貨幣が铸造され、全国に貨幣経済が浸透しました。明治4年(1871)の新貨条例では、新たな通貨単位として「円」が採用され、現在に至っています。

こうした歴史の中で、銭は物品交換時の支払い対価の他に、埋葬時の六道銭や地鎮め等の祭祀、奉賽銭等、生活の中で様々に使用されてきました。

本展では、大分県内から出土した銭を中心に、銭の歴史とともに生活の中で銭が果たした役割を紹介します。展示を通じて、郷土の歴史や文化に親しんでいただくと幸いです。



1 銭の登場

世界で最も古い金属貨幣は、紀元前7世紀の小アジア・リュディア王国で発行されたものといわれています。中国では周王朝後半(戦国時代)に刀や布の形をした青銅製の貨幣が出現し、紀元前3世紀頃から円形で中央に四角い孔を持つ銭が定着しました。621年に唐が発行した開元通寶は、孔の周囲に4字を配しており、以降の中国銭や、和同開珎等の日本の古代貨幣、東アジアの諸銭貨はこのスタイルを踏襲しています。

日本では7世紀後半に無文銀銭や富本銭が作られました^{ふほんせん}が、畿内周辺で流通した程度のものでした。708年の和同開珎以降、朝廷は平城京や平安京などの建設費用を得る目的で銭貨(皇朝十二銭)を発行し、全国的に一定程度の流通を見せました。しかし、銅の国内生産の不調とともに銭の小型化や品質低下が進んだことで銅銭が嫌われ、また都城等の建設が一段落したこともあって、958年の乾元大宝^{けんげんたいほう}を最後に銭貨の発行が停止されました。

●日本で出土する中国古代銭

中国で貨幣が登場した頃の日本は、弥生時代にあたります。弥生時代の遺跡からは、半兩銭や五銖銭、貨泉といった中国古代銭が出土することがありますが、これらの銭は貨幣として使用されたものではなく、威信財や呪術具、あるいは銅の素材として使われたとみられています。また、中世の一括埋納銭の中に中国古代銭が混入しているケースもあり、すべてが弥生時代に伝来したとは限らない点には注意が必要です。



刀銭(方首刀)
中国・周王朝(B.C.5~3世紀頃)
杵築市鴨川採集
大分県立歴史博物館 蔵



四銖半兩
中国・前漢(B.C.175年初鑄)
佐伯市・山上寺跡
佐伯市教育委員会 蔵



大泉五十(参考展示)
中国・新(A.D.7年初鑄)
出土地不詳
大分県立歴史博物館 蔵



貨泉
中国・新(A.D.14年初鑄)
大分市・蔭山万寿寺跡(第7次)



貨泉(参考展示)
中国・新(A.D.14年初鑄)
出土地不詳
大分県立歴史博物館 蔵



和同開珎
日本(708年初鑄)
宇佐市・尾畑遺跡



和同開珎(参考展示)
日本(708年初鑄)
出土地不詳
大分県立歴史博物館 蔵



開元通寶
中国・唐(621年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第88次)



延喜通寶
日本(907年初鑄)
宇佐市・弥勒寺跡
大分県立歴史博物館 蔵



II 中世渡来銭の世界

中世では、平清盛による日宋貿易を皮切りに、足利義満^{かんごうぼうえき}の勘合貿易や、倭寇^{わごう}を介した私貿易を通じて、多量の中国銭がもたらされました。韓国で発見された14世紀の沈没船—新安沈船は、京都東福寺の伽藍再建費を賄うために派遣された貿易船とされ、日本に向けた積荷の中に総計28トン、約800万枚と推計される銭が積まれていました。

II-1 全国の備蓄銭における渡来銭出土量のTOP10

ここでは中世に日本で流通した代表的な銭を紹介し、全国的な銭の集計はありませんが、鈴木公雄氏による出土備蓄銭の分析(鈴木1999)から、全国で多く出土している銭の種類を知ることができます。1位～10位は以下のとおりです。



①皇宋通寶
中国・北宋(1038年初鑄)
大分市・蔭山万寿寺跡
(第6次)



②元豊通寶
中国・北宋(1078年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第88次)



③熙寧元寶
中国・北宋(1068年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第77次)



④元祐通寶
中国・北宋(1086年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第34次)



⑤開元通寶
中国・唐(621年初鑄)
大分市・蔭山万寿寺跡
(第6次)



⑥永樂通寶
中国・明(1408年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第34次)



⑦天聖元寶
中国・北宋(1023年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第43次)



⑧紹聖元寶
中国・北宋(1094年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第5次)



⑨政和通寶
中国・北宋(1111年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第88次)



⑩聖元元寶
中国・北宋(1101年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第5次)

II-2 中世都市・豊後府内の渡来銭出土量TOP10

豊後府内から出土する銭については、坂本嘉弘氏による研究があります(坂本2012)。多少の順位の変動はあるものの、概ね全国で多く出土する銭と相違はありません。明銭では永樂通寶に代わって洪武通寶がランクインしています。永樂通寶は東日本で多く出土するのに対し、洪武通寶は西日本、特に九州で多く出土する傾向にあり、それを反映しています。



①元豊通寶
中国・北宋(1078年初鑄)
大分市・蔭山万寿寺跡
(第6次)



②熙寧元寶
中国・北宋(1068年初鑄)
大分市・蔭山万寿寺跡
(第6次)



③元祐通寶
中国・北宋(1086年初鑄)
大分市・蔭山万寿寺跡
(第6次)



④皇宋通寶
中国・北宋(1038年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第43次)



⑤洪武通寶
中国・明(1368年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第51次)



⑥開元通寶
中国・唐(621年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第51次)



⑦紹聖元寶
中国・北宋(1094年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第51次)



⑧天聖元寶
中国・北宋(1023年初鑄)
大分市・蔭山万寿寺跡
(第6次)



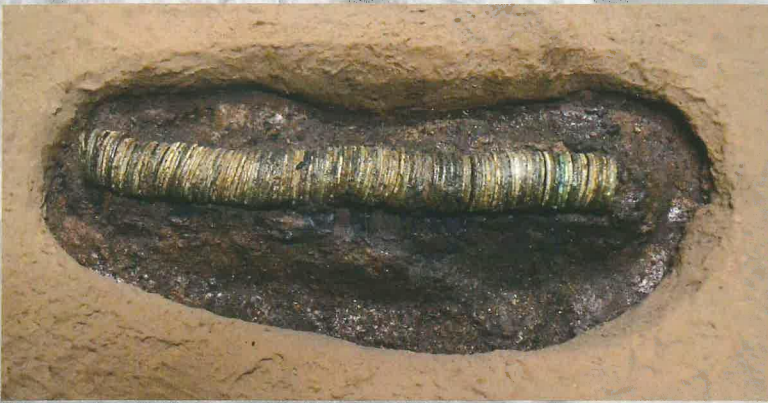
⑨祥符通寶
中国・北宋(1008年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第51次)



⑩聖元元寶
中国・北宋(1101年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第88次)

II-3 さまざまな渡来銭

日本では唐・北宋だけではなく、五代十国や金・元・南宋・明といった中国の歴代王朝、さらには中国の周辺の国々の銭貨も出土しています。豊後府内から出土する銭貨の中にも、中国銭に混じって朝鮮半島やヴェトナムの安南銭が見られます。こうした銭は南蛮貿易を通じてもたらされたものとみられ、国際貿易都市として繁栄した府内の特徴を示しています。



緡銭
中国・北宋銭ほか(15世紀)
日田市・尾漕遺跡

● 緡銭

銭は中央に孔が空いており、ここに紐を通すことで銭を束ねることができます。こうして束ねられた銭が緡銭です。中世では銭97枚(近世では96枚)を束ねたものを100枚と見なす慣例があり、これを1連といいます。10連(銭約970枚)で1貫文となります。一括埋納銭や中世墓からは緡状態の銭が出土することがあります。

● 大銭～流通しなかった銭～

銅銭は1枚1文が基本ですが、中国では1枚で2～10倍の価値を持つ大銭が発行されました。大銭は一文銭(小平銭)よりも銭径が大きく、2倍通用の銭を「折二銭」、3倍・5倍・10倍通用の銭はそれぞれ「当三銭」・「当五銭」・「当十銭」といいます。中世の日本は中国から多量の銅銭を輸入しましたが、大銭の出土は多くはありません。中世前半の日本では銭1枚＝1文での使用が徹底され、計算が煩雑な大銭は敬遠されました。そのため、大銭の縁を削って、小平銭のサイズに揃えてまでして、1文銭として使用していました。

豊後府内でも数点の大銭が出土していますが、銭貨として流通したものではなく、海外からの貿易従事者が持ち込んだか、銅製品の素材として持ち込まれた可能性もあります。



乾元重寶(当十銭)
中国・唐(758年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡(第5次)



熙寧重寶(折二銭)
中国・北宋(1071年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡(第9次)
※重要文化財



崇寧通寶(当十銭)
中国・北宋(1103年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡(第18次)
※重要文化財



熙寧重寶(折二銭)
中国・北宋(1071年初鑄)
大分市・蔣山万寿寺跡(第10次)

背面に別の銭(小平銭)が固着していますが、縁を削って径を小さくしていることが分かります。



崇寧重寶(当十銭)
中国・北宋(1103年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡(第69次)
※重要文化財



洪武通寶(紀重銭・背「一銭」)
中国・明(1368年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡(表:第51次、裏:第41次)

背面に「一銭」と銭の量目が刻まれています。これを紀重銭といいます。「一銭」・「二銭」・「三銭」・「五銭」などがありますが、中世の日本では大銭が普及しなかったため、その多くは「一銭」です。

●さまざまな渡来銭



咸康元寶
中国・前蜀(925年初鑄)
大分市・蔣山万寿寺跡
(第6次)



周通元寶
中国・後周(955年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第41次)



唐国通寶
中国・南唐(959年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡(左:第12次、中:第29次)
佐伯市・曳地館跡(右)



宋通元寶
中国・北宋(960年初鑄)
佐伯市・曳地館跡



正隆元寶
中国・金(1157年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第92次)



至大通寶
中国・元(1310年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡(第92次:左)
大分市・蔣山万寿寺跡(第7次:右)



嘉泰通寶
中国・南宋(1201年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第7次)



宣徳通寶
中国・明(1433年初鑄)
大分市・蔣山万寿寺跡
(第10次)

●Column 消えた「〇〇元寶」

渡来銭の大部分を占める北宋銭をはじめ、中国銭では銭名として皇宋通寶や元豊通寶などの「〇〇通寶」とともに、「熙寧元寶」や「聖宋元寶」などの「〇〇元寶」が用いられてきました。しかし、元の至大元寶を最後に、「〇〇元寶」という銭名は姿を消します。元の後に建国した明でも、「〇〇元寶」という名の銭は発行されませんでした。これは、「元」の字が、明の初代皇帝である洪武帝(朱元璋)に通じることから、使用を避けたことによります。明の後に成立した清でも、「〇〇元寶」は発行されませんでした。



東国通寶
朝鮮半島・高麗(1097年初鑄)
大分市・蔣山万寿寺跡
(第6次)



朝鮮通寶
朝鮮半島・李氏朝鮮(1423年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡(左:第11次、右:第96次)



ヴェトナム・後黎(1434年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第43次)
※重要文化財



洪順通寶
ヴェトナム・後黎(1509年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第12次)
※重要文化財

●Column 永楽通寶の字を書いたのは日本人!?

永楽通寶の字を書いたのは日本人、という伝があります。五山僧の仲方中正は、遣明船で明国に渡った際に使節の筆談役を務めていたところ、永楽帝にその能書ぶりを高く評価され、帝の命を受けて永楽通寶の文字を書いた、ということです。これについては否定的な見解もあって真相は不明ですが、永楽通寶は日本への輸出用に作られたという説があり、さらにその字を書いたのが日本人というのは、何か因縁めいたものを感じさせます。東野治之は、日本向けの銭の文字を日本人に書かせることで日本側の歓心を買ひ、幕府の倭寇鎮圧の労に報いる意図があったのではないかと指摘しています(東野1997)。

●Column 永楽通寶は日本向けに作られた!?

永楽通寶は日本でもよく知られた明銭で、織田信長が旗指物のデザインに採用したことはよく知られています。永楽通寶は、永楽帝によって1408年頃に公式に鑄造されたものですが、それ以前に明では銅銭の通用が禁止され、紙幣に一本化されていました。銭の発行は、皇帝の代替わりの儀式として行われたという意味もありますが、主には貿易の下賜品—特に銅銭を求める日本への輸出用に鑄造されたとみられています。中国内で明代の遺跡から永楽通寶がほとんど出土しないという考古学的な状況は、この点と実に整合的です。中国内での永楽通寶の出土事例については、古澤義久が詳細に検討しています(古澤2022)。

II-4 渡来銭の産地・年代をさぐる

銭の中には、銭貨の背面に製作地や製作年代を示す文字が刻まれているものがあります。製作地を示すものを紀地銭^{きじせん}といいます。唐の開元通寶は、621年以降、数度にわたって鑄造されていますが、紀地銭は製作年代が限られるため、年代把握の手掛かりとなります。また、南宋銭には背面に数字を持つものがあり、これは製作した年を表すものです。例えば、背面に「十一」の銘を持つ淳熙元寶^{じゆんきげんぽう}は、淳熙11年の鑄造であると分かります。こうした銭を「南宋番銭」といいます。

●紀地銭



開元通寶(背「洛」)
中国・唐(845年初鑄)
大分市・蒋山万寿寺跡
(第6次)
※洛陽産



開元通寶(背「潤」)
中国・唐(845年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第13次)
※潤州産



洪武通寶(背「浙」)
中国・明(1368年初鑄)
大分市・蒋山万寿寺跡
(第6次)
※浙江省杭州産



洪武通寶(背「浙」)
中国・明(1368年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第36次)
※浙江省杭州産



大定通寶(背「申」)
中国・金(1188年)
大分市・中世大友府内町跡
(第77次)
※金の 大定年間で申年は
1188年にあたる。

●干支を表す

●南宋番銭



淳熙元寶(背「十一」)
中国・南宋(1184年)
大分市・蒋山万寿寺跡
(第7次)



淳熙元寶(背「十五」)
中国・南宋(1188年)
大分市・中世大友府内町跡
(第8次)



淳熙元寶(背「十六」)
中国・南宋(1189年)
大分市・蒋山万寿寺跡
(第7次)



嘉定通寶(背「三」)
中国・南宋(1210年)
大分市・蒋山万寿寺跡
(第6次)



紹定通寶(背「五」)
中国・南宋(1232年)
大分市・中世大友府内町跡
(第7次)



端平元寶(背「元」)
中国・南宋(1234年)
大分市・中世大友府内町跡(第72次)



淳祐元寶(背「十」)
中国・南宋(1188年)
大分市・蒋山万寿寺跡(第7次)

II-5 エラー銭・まじない銭

当時流通した銭の中には、表面と裏面で明らかに范がずれたものや、方孔内に切り込みの入った星形孔銭とよばれるものが見られます。こうしたエラー銭は、本来は排除されて流通しないものですが、14世紀以来、中国・日本ともに銭不足の状況にあったため、こうした不良銭でも流通したのかもしれませんが。あるいは、この頃から摸鑄銭が盛んに作られており、その際に生じたエラー銭が出回った可能性もあります。また、用途は不明ながら、郭を削って方穴を丸くした円孔銭や、銭の縁を削って径を一回り小さくした磨輪銭もみられます。

●エラー銭



天聖元寶
中国・北宋(1023年初鑄)
大分市・蔣山万寿寺跡
(第10次)

熙寧元寶
中国・北宋(1068年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第77次)

熙寧元寶
中国・北宋(1068年初鑄)
大分市・蔣山万寿寺跡
(第6次)

元豊通寶
中国・北宋(1078年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第75次)

紹聖元寶
中国・北宋(1094年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第88次)

●星形孔銭

方孔が四角ではなく、各辺に切り込みが入ることで、またたく星のような形に見えるものがあります。これを「星形孔銭」といいます。その特徴的な形からまじない銭ともいわれていますが、鑄上がった銭を束ねて、方孔に砥石を挿し込んで整形する際に孔の向きがずれたために傷が付いたもので、一種のエラー銭といえます。豊後府内でもそれなりの数が出土しており、割と頻繁に生じるエラーであったようです。



開元通寶
中国・唐(621年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第88次)

景祐元寶
中国・北宋(1034年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第34次)

皇宋通寶
中国・北宋(1038年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第80次)

皇宋通寶
中国・北宋(1038年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第96次)



熙寧元寶
中国・北宋(1068年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第80次)



元豊通寶
中国・北宋(1078年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第88次)



紹聖元寶
中国・北宋(1094年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第77次)

●円孔銭

銭の中央の孔は通常は四角いものですが、中には本来あるべき郭を削り取って孔を丸くした「円孔銭」が存在します。その目的は明らかではありません。



嘉祐通寶
中国・北宋(1054年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡(第30次)



熙寧元寶
中国・北宋(1068年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡(第75次)

●磨輪銭

銭の中には、しばしば縁を削って小さくした磨輪銭がみられます。大銭の場合、小平銭と径を揃えて1文銭として通用させるために縁を削ることが行われましたが、通常の小平銭でも意図的に縁を削って小さくしたものが存在します。その目的は不明ですが、何らかの祭祀行為などに用いられたのでしょうか？



祥符元寶
中国・北宋(1009年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第75次)



天禧通寶
中国・北宋(1017年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第75次)



皇宋通寶
中国・北宋(1038年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第35次)



元豊通寶
中国・北宋(1078年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第35次)



元豊通寶
中国・北宋(1078年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第30次)



聖宋元寶
中国・北宋(1101年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第34次)



聖宋元寶
中国・北宋(1101年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第35次)

II-6 摸鑄銭

中世を通じて日本は中国から銅銭を輸入し続けたイメージがありますが、実際には14世紀頃から銭不足の状況が続いていました。14世紀後半頃から、明は海賊防止や密貿易取締りのため、度々「海禁令」を^{かいきんれい}発し、政府使節以外の自国民の自由な海外渡航を禁止しました。これにより自由な貿易が制限されたため、日本に入ってくる銭の量が激減しました。また、中国内でも銅銭を輸出し続けた結果、銅資源が枯渇し、銅銭発行は低調^{ちゆうてう}となってやがて紙幣へと移行していきます。

中国・日本ともに銭が不足した結果、銭を私的に鑄造する摸鑄が行われるようになりました。また、倭寇などによる密貿易を通じて、中国からも摸鑄銭が大量にもたらされました。こうした粗悪銭は本来は撰銭によって排除されるものですが、当時の銭不足もあって、良銭に対して価値を下げて通用させざるを得ず、結果として戦国時代後半頃には摸鑄銭や無文銭などの粗悪銭^{ひたせん}(鏽銭)が主な通用貨幣の役割を担いました。

14～16世紀にかけて繁栄した豊後府内では多量の銅銭が出土していますが、その中には相当数の摸鑄銭が存在しているはずですが。豊後府内における摸鑄銭の識別は、現状では十分に行われていません。しかし、銭を詳細に観察すると、文字が潰れていたり位置がずれたものや、薄手で径が小さいもの、背面の縁や郭がなく平坦なもの、金属組成の差で色調が明確に異なるものなど、摸鑄銭とみられるものが少なからず存在します。また、慶長年間に日本で作られた^{けいちょうつうほう}慶長通寶や、文字の無い無文銭も出土しています。



元豊通寶
中国・北宋(1078年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第29次)



元祐通寶
中国・北宋(1086年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第29次)



元祐通寶
中国・北宋(1086年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第29次)



洪武通寶
中国・明(1368年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第41次)



開元通寶
中国・唐(621年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第43次)



至道元寶
中国・北宋(995年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第55次)



皇宋通寶
中国・北宋(1068年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第95次)



元祐通寶
中国・北宋(1086年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第92次)



元祐通寶
中国・北宋(1086年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡(第77次)



洪武通寶
中国・明(1368年初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第29次)



洪武通寶
中国・北宋(1368初鑄)
大分市・中世大友府内町跡
(第34次)



慶長通寶
日本(16世紀末～17世紀初頭)
大分市・中世大友府内町跡
(第11次)



慶長通寶
日本(16世紀末～17世紀初頭)
大分市・中世大友府内町跡
(第77次)



慶長通寶
日本(16世紀末～17世紀初頭)
大分市・中世大友府内町跡
(第79次)

●Column 嫌われた明銭

摸鑄銭の増大を受けて、日本でも15世紀後半以降、度々「撰銭令^{スリゼにれい}」が出されるようになりました。文明17年(1485)に周防の大名大内氏が出した撰銭令では、大内氏におさめる税金は良質の銭で納めるべきだが、永楽銭・宣徳銭は100文中に20文まで加えてよいこと、利息や一般の売買については永楽銭・宣徳銭は受け取りを拒否できず、「さかい銭」(摸鑄銭か)・「なわ切」(洪武銭)・「打平め」(無文銭)は無文銭は拒否できること、ただし永楽・宣徳銭の使用は100文中30文までとすること、が定められました。摸鑄銭や無文銭は当然のことながら、洪武通寶や永楽通寶、宣徳通寶といった良質な明銭までが嫌われていたことが分かります。理由は明らかではありませんが、作りたての摸鑄銭が大量に出回ったことで、古色然とした北宋銭に比べて見た目明らかに新しいこれら明銭が摸鑄銭と見なされて、受け取りを拒否された可能性が考えられます。



無文銭
日本(16世紀頃)
大分市・中世大友府内町跡(第88次)

●無文銭(打平め)

日本で作られた銭として「無文銭」があります。円形方孔の銭形をしていますが、文字どおり文字がありません。流通している銭から型をとり鑄造を繰り返すと、文字が潰れて無文銭ができ上がります。日本産の銭は錫が少なく銅の比率が高いため、文字が潰れやすいのだそうです。そのため、最初から文字の無い銭まで作られました。大阪の堺環濠都市遺跡^{さかいかんごうとしいせき}からは、文字の無い銭の鑄型が出土しています。こうした無文銭は、戦国時代には良銭の10分の1の価値で通用していました。

III 近世貨幣の展開

江戸幕府は、寛永13年(1636)に寛永通寶の鑄造を開始しました。日本の公式錢として発行されたのは、平安時代の乾元大寶以来のことです。これを受けて、寛文10年(1670)にビタ錢の通用を停止し、錢は寛永通寶に統一されました。

寛永通寶は江戸時代を通じて作られましたが、寛永13年～万治2年(1659)に製造されたものを古寛永といいます。次いで、寛文8年(1668)には新たな寛永通寶が発行されました。この時の錢は背面に「文」字を持つことから、文錢と呼ばれています。元禄10年(1697)以降、全国各地に錢座が設置され、寛永通寶の鑄造が行われました。

こうして江戸時代を通じて流通した寛永通寶ですが、これに混じって旧来の渡来錢やビタ錢、中国の清錢しんも少ないながら使われていました。また、錢ではありませんが、煙管を潰して錢のようにした雁首錢も見られます。



寛永通寶(古寛永)
日本(1636初鑄)
杵築市・杵築城下町



寛永通寶(文錢)
日本(1668初鑄)
大分市・府内城・城下町(三ノ丸北口跡:左)
杵築市・杵築城下町(右)



寛永通寶(二水永?)
日本(1626初鑄)
大分市・府内城・城下町(第29次)
大分市教育委員会 蔵

●二水永の寛永通寶

寛永通寶の公鑄以前に作られた、非公式の寛永通寶があります。寛永3年(1626)に水戸の商人が幕府と水戸藩の許可を得て鑄造したもので、「永」の字が「二」と「水」を合わせた形で、「二水永」と呼ばれています。

府内城・城下町第29次調査では、二水永の寛永通寶が1点出土しています。肝心の永字が錆のため不鮮明ですが、拓本では二水永のように見えます。



●小型化・薄手化した新寛永

古寛永や文錢では、径が大きく厚みのある良質なものが多く見られますが、その後の新寛永には径が一回り小さく、薄手化した粗雑なものが混じるようになります。この理由の一つに、「荻原錢」があります。

元禄年間に勘定吟味役にあつた荻原重秀おぎわらしげひでは、幕府財政再建のため、金・銀の含有率を下げる金・銀貨の改鑄を行いました。錢についても小型・薄手化し、孔を大きくして1枚当りの銅の量を抑えて、錢不足の解消を図りました。

寛永通寶(新寛永)
日本(1697初鑄)
杵築市・杵築城下町



康熙通寶
中国・清(1662初鑄)
豊後大野市・市場遺跡
豊後大野市教育委員会 蔵

※背面に満州文字を刻む。



雁首錢
日本(近世)
杵築市・杵築城下町

●雁首錢

煙管の火皿部分を叩き潰して、錢のように似せたもの。これ自体は錢として流通したものではありませんが、緡に混ぜることで錢をごまかすなど悪用したものとみられます。

●古寛永と新寛永

古寛永と新寛永は、「寛」と「寶」の字体の違いで容易に識別できます。古寛永は「寶」の「貝」部分の下部が、片仮名の「ス」状となる(「ス貝寶」・「ス寶」)のに対し、新寛永では「ハ」状(「ハ貝寶」・「ハ寶」)となります。

また、「寛」字については、古寛永は「見」の儿部ひとあしの付け根が接しているのに対し、新寛永では離れています。



古寛永

新寛永

●各地で作られた寛永通寶

元禄10年(1697)から発行された新寛永は、全国40箇所以上に銭座が置かれたことが分かっています。鑄造された銭の中には、背面に鑄造場所を示す文字を持つものがあります。「佐」は佐渡相川、「長」は長崎を表します。背面に「元」の銘をもつものは寛保元年(1741)から大坂高津たかすで鑄造されたもので、元字銭かんじせんと呼ばれます。また、京都など関西で鑄造された不旧手ふきゅうでと呼ばれる一群は、「通」の字の頭が通常は片仮名の「コ」字となるのに対し、「マ」字となることから「マ頭通」と呼ばれています。

元文4年(1739)には、銭の材料となる銅の不足を受けて寛永通寶鉄銭が製造されました。鉄銭は甘藷かんしょ(サツマイモ)の栽培奨励で知られる青木昆陽あおきこんようの献策によるものといわれています。



寛永通寶(新寛永・背「元」)
日本(18世紀)
大分市・府内城・城下町
(上:第22次、下:第17次)
大分市教育委員会 蔵



寛永通寶(新寛永・背「佐」)
日本(18世紀)
杵築市・杵築城下町



寛永通寶(新寛永・背「佐」)
日本(18世紀)
大分市・府内城・城下町
(第17次)
大分市教育委員会 蔵



寛永通寶(新寛永・背「長」)
日本(18世紀)
杵築市・杵築城下町



寛永通寶(新寛永・マ頭通)
日本(18世紀)
大分市・中世大友府内町跡(第96次:左)
杵築市・杵築城下町(右)



寛永通寶(鉄一文銭)
日本(1739初鑄)
杵築市・杵築城下町

●大銭の登場

明和5年(1768)に、江戸幕府は^{しんちゆう}真鍮製の寛永通寶四文銭を発行しました。この四文銭はまたたく間に全国に流通し、日本で通用した最初の大銭となりました。寛永通寶四文銭は背面に浪文が施されています。最初のもは21浪でしたが、製造過程で不良品が続出したため、翌年からは11浪に変更されました。この浪文は、同じく四文銭の^{ぶんきゆうえいほう}文久永寶にも引き継がれています。

天保6年(1835)には、1枚で100文にあたる^{てんぽうつうほう}天保通寶が発行されています。小判形で中央に方孔があり、背面には額面を示す「當百」と、金座を管理する後藤家の花押が刻まれています。また、薩摩藩では幕府の許可を得て藩内通用の「琉球通寶」^{りゅうきゆうつうほう}を発行しました。この琉球通寶が佐伯城下町から1点出土していますが、どのような経緯で持ち込まれたものかは不明です。



寛永通寶(真鍮四文銭・背21浪)
日本(1768年)
中津市・中津城下町遺跡(殿町)
中津市教育委員会 蔵



寛永通寶(真鍮四文銭・背11浪)
日本(1769年初鑄)
竹田市・野田家屋敷跡
竹田市教育委員会 蔵



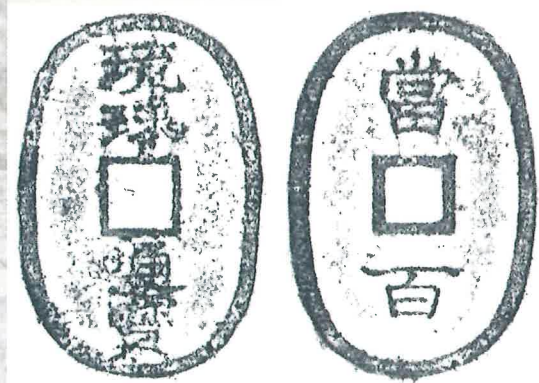
文久永寶
日本(1863年初鑄)
豊後大野市・市場遺跡
豊後大野市教育委員会 蔵



文久永寶(略宝)
日本(1863年初鑄)
竹田市・城下町遺跡(四山社製糸工場跡)
竹田市教育委員会 蔵



天保通寶
日本(1835年初鑄)
大分市・府内城・城下町(第22次)
大分市教育委員会 蔵



琉球通寶
日本・薩摩藩(1862年初鑄)
佐伯市・佐伯城下町(西名家屋敷跡)
佐伯市教育委員会 蔵



天保通寶
日本(1835年初鑄)
竹田市・武藤家屋敷跡
竹田市教育委員会 蔵

●銭を作る～岡藩銭座跡の出土品～

江戸幕府は寛永13年(1636)に、江戸の芝・浅草と近江国坂本で寛永通寶の製造を開始しましたが、翌寛永14年(1637)には、全国各地に銭座を設置し、鑄銭を行いました。その際に設置された銭座のひとつが、竹田市の岡藩銭座です。

岡藩銭座跡ではこれまで数度の発掘調査が行われていますが、銭座に関連する遺構は見つかっていません。しかし、^{るつぼ}坩堝や砥石、銅の鑄棹等、銅銭鑄造に関わる遺物が出土しています。鑄棹は鑄型の湯道に溜まった銅で、湯道の先に枝状に銅銭の範が配されていました。坩堝は素材の銅を溶解したもので、金属滓の付着が見られます。砥石は表面に無数の凹線がみられ、銭の縁を研ぐのに使用されました。

岡藩に銭座が設置されたのは、領内に尾平鉾山^{おひらこうざん}があり銅が賄えることがその理由とみられます。文献史料によると、岡藩銭座で鑄られた寛永通寶には、背面に「竹」の字があったといいますが、裏に銘が付くのは1668年の文銭以のことで、古寛永には基本的に見られないこと、「竹」銘のある寛永通寶の確実な出土例がないことから、これが事実かどうかは断定できません。

岡藩銭座は、寛永14年4月から寛永16年(1639)10月までのわずか2年半で操業を停止し、その役割を終えています。



坩堝



鑄棹

寛永通寶(古寛永)・銅鑄棹・坩堝・砥石
日本(17世紀)
竹田市・城下町遺跡(岡藩銭座跡)
竹田市教育委員会 蔵



岡藩銭座跡に建つ記念碑
※上部に古寛永があしらわれています。

IV くらしのなかの銭

銭は物品交換時の支払い対価の他に、さまざまな場面で使用されました。ここではそうした事例を紹介します。



備蓄銭
日本(14世紀前半)
大分市・蔭山万寿寺跡(第7次)
※重要文化財

●備蓄銭

数千から数万、時には数十万枚に及ぶ銭が、土中に埋められた状態で発見されることがあります。これを一括埋納銭、あるいは備蓄銭びちくせんといいます。蓄えた大量の銭を盗難や戦乱、自然災害から守るため、土中に埋めたものが、何らかの理由で掘りだされないまま残されていたものです。豊後府内では、蔭山万寿寺跡の一角から、創建期に近い14世紀前半頃の約1万枚もの銭が発見されています。ちなみに、鈴木公雄まごもさん まんじゅ し あとは寺社境内で発見される備蓄銭について、祠堂銭しどうせん(寺社が寄進銭等を元手に行う融資)との関係を指摘しています(鈴木2002)。

●銭を用いた祭祀

発掘調査では、土器の中に銭を入れて埋納したり、あるいは繙銭や複数枚の銭を埋納した、祭祀行為の痕跡が見つかることがあります。こうした祭祀は、地鎮めや何らかのまじないのために埋められたものとみられます。



土師器鍋・無文銭
日本(16世紀後葉~17世紀前半)
玖珠町・四日市遺跡(第11次)

※地元でガラん様と呼ばれる祠の傍で発見された土坑で、フライパン形の鍋とともに多量の無文銭が出土しました。



土師器皿・寛永通寶
日本(17世紀)
佐伯市・佐伯城下町(山中家屋敷跡)
佐伯市教育委員会 蔵

※武家屋敷の一角で発見された祭祀遺構で、3枚の土師器皿の上に5枚の寛永通寶が置かれていました。

●六道銭

六道銭とは埋葬時に死者とともに納める銭貨のことで、俗に「三途の川の渡し賃」といわれています。六道信仰の広がりとともに行われるようになった風習で、六道(地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道)の全ての世界に現れて衆生を救う地蔵菩薩への賽銭さいせんともいわれます。六道銭は14~15世紀頃から多く確認されますが、豊後では塔身に地蔵菩薩を刻む石殿せきでんが14世紀、石幢せきどうが15世紀頃から盛んに造立されており、この頃から一般化したようです。一般的には六文銭として知られていますが、六文が定着するのは近世で、中世では数枚~十数枚で一定せず、中には繙銭が納入されたものもあります。



瓦器杯・六道銭
日本(14世紀)
宇佐市・広谷遺跡



※近世墓の埋納銭。銭の表面に繊維痕が残っており、六道銭を頭陀袋に入れて、死者の首に掛けて埋納したとみられます。

六道銭
日本(18世紀)
大分市・中尾近世墓地



六道銭
日本(14世紀)
大分市・中世大友府内町跡(第11次)



●奉賽銭

大分市下原遺跡では、調査区の一隅から50点ほどの寛永通寶がまとまって出土しています。かつてこの場所には神社が祀られており、これらの銭は神社への奉賽銭であったとみられています。寛永通寶は古寛永・新寛永・鉄一文銭を含み、中世の渡来銭や明治時代の一銭銅貨も含まれています。雁首銭も銭として使われたものでしょう。

奉賽銭
日本(17~19世紀)
大分市・下原遺跡



●銅銭のリサイクル!?~銅素材としての銭~

中世大友府内町跡第77次調査では、鍛冶に関連した礫敷遺構 SX475が発掘されています。この遺構からは多量の小型の埴塼や砥石とともに、湯玉とみられる無数の銅粒が出土しており、青銅製品の製作工房とみられています。そこから1点の銭が出土していますが、一部が欠け、文字は見えません(無文銭の可能性も)。埴塼が小型であることから、製作物も小型品であったとみられ、この銅銭は銅素材として持ち込まれた可能性が指摘されています。



SX475出土埴塼・砥石・銅銭
日本(16世紀後半)
大分市・中世大友府内町跡(第77次)
※重要文化財(埴塼の一部)

●くらしにとけ込む銭

江戸時代の後半になると、日常の生活道具の中に銭をデザインしたものが登場しました。陶磁器のデザインとして描かれたり、銭貨形の土製品や泥面子なども発掘されています。こうした遺物は、庶民の生活の中にまで銭が浸透していたことを物語っています。



磁器皿(見込に天保通寶)
日本(19世紀)
中津市・中津城下町遺跡(殿町)
中津市教育委員会 蔵



泥面子
上:寛永通寶四文銭形
左:寛永通寶(新寛永)形
右:天保通寶形
日本(18世紀後半~19世紀)
大分市・府内城・城下町(第29次)
大分市教育委員会 蔵



寛永通寶(新寛永)形土製品
日本(19世紀)
竹田市・城下町遺跡(四山社製糸工場跡)
竹田市教育委員会 蔵

V 近代貨幣の登場

明治時代に入っても近世貨幣がそのまま使用されていましたが、明治4年(1871)に新貨条例が公布され、貨幣制度が整えられました。新貨幣は全て円形で、圓・銭・厘を単位とした十進法が採用されました。明治4年に1圓・2圓・5圓・10圓・20圓の5種類の金貨と、1圓・50銭・20銭・10銭・5銭の5種類の銀貨が、明治6年(1873)に2銭・1銭・半銭・1厘の4種類の銅貨が発行されました。近世貨幣は明治7年(1874)に旧金貨及び銀貨が、1890年代には寛永通寶鉄銭・天保通寶の通用がそれぞれ停止されましたが、寛永通寶一文銭・四文銭と文久永寶は昭和28年(1953)年の「小額通貨の整理及び支払金の端数計算に関する法律」まで通用貨幣として存在しました。

なお、単位としての圓(円)は、中国でドル銀貨を銀圓と呼んでいたことに由来します。中国では圓は画数が多いため、発音が同じ「元」が用いられるようになりました。韓国のウォン(元)も同じ由来によるものです。

●新貨幣の交換レート

新貨条例により、貨幣の基準となる単位が「両」から「圓(円)」に切り替えられ、これにより「旧1両＝新1圓」として整理されました。また、圓と銭・厘の関係は、「1圓＝100銭」、「1銭＝10厘」と定められました。1銭銅貨の表には、「以百枚 換一圓(百枚を以て一圓に換える)」、半銭銅貨には「以二百枚 換一圓」と刻まれています。



五銭銀貨
日本(1871年初鑄)
大分市・府内城・城下町(第29次)
大分市教育委員会 蔵



一銭銅貨
日本(1877年)
大分市・府内城・城下町(第29次)
大分市教育委員会 蔵



一銭銅貨
日本(1874年)
豊後大野市・市場遺跡
豊後大野市教育委員会 蔵



半銭銅貨
日本(1884年)
大分市・府内城・城下町(第29次)
大分市教育委員会 蔵



半銭銅貨
日本(1875年)
豊後大野市・市場遺跡
豊後大野市教育委員会 蔵

●引用・参考文献

城戸 誠1997「豊後岡藩(竹田)銭座跡」『近世の出土銭Ⅰ—論考編Ⅰ』(永井久美男編)、兵庫埋蔵銭調査会

坂本嘉弘2012「中世大友府内町跡の出土銭貨とその周辺」『西海考古』第8号、西海考古同人会

櫻木晋一2016『貨幣考古学の世界』考古調査ハンドブック15、ニュー・サイエンス社

鈴木公雄1999『出土銭貨の研究』、東京大学出版会

鈴木公雄2002『銭の考古学』歴史文化ライブラリー140、吉川弘文館

高木久史2016『通貨の日本史—無文銀銭、富本銭から電子マネーまで—』中公新書2389、中央公論新社

東野治之1997『貨幣の日本史』朝日選書574、朝日新聞社

中島圭一編2022『日本の中世貨幣と東アジア』、勉誠出版

古澤義久2022「永樂通寶日本流通経路の検討—東南アジア経路説の提唱—」『日本の中世貨幣と東アジア』、勉誠出版

・本企画展の開催にあたり、下記の方々に御協力をいただきました。

機関：大分県立歴史博物館、大分市教育委員会、佐伯市教育委員会、竹田市教育委員会、中津市教育委員会、豊後大野市教育委員会
個人：井 大樹、衛藤美紀、城戸 誠、真田博幸、福田 聡、福永素久、松浦憲治、諸岡 郁(五十音順、敬称略)

・本企画展の企画・構成及び本書の執筆・編集は横澤 慈が行いました。

・本書掲載の写真は、大分県立埋蔵文化財センター所有のもの他、各所有者の許可を得て撮影したものを使用しました。拓本は各報告書掲載のものを転載しました。

・掲載資料のうち、所有者の記載のないものは大分県立埋蔵文化財センターの所蔵品です。

企画展『銭は天下の回りもの』展示解説資料 正誤表

P4 さまざまな渡来銭 2段目の左から3番目

(誤) 至大通寶

中国・元 (1310年初鑄)

中世大友府内町跡 (第92次:左)

(正) 至大通寶

中国・元 (1310年初鑄)

中世大友府内町跡 (第30次:左)

P4 さまざまな渡来銭 写真最下段の左から3番目

(誤) ヴェトナム・後黎 (1434年初鑄)

大分市・中世大友府内町跡 (第43次)

(正) 紹平通寶

ヴェトナム・後黎 (1434年初鑄)

大分市・中世大友府内町跡 (第43次)

P5 南宋番銭 写真最下段の右

(誤) 淳祐元寶 (背「十」)

中国・南宋 (1188年)

(正) 淳祐元寶 (背「十」)

中国・南宋 (1250年)

P8 摸鑄銭 写真中段の左から3番目

(誤) 皇宋通寶

中国・北宋 (1068年初鑄)

(正) 皇宋通寶

中国・北宋 (1038年初鑄)

P12 銭を作る～岡藩銭座跡の出土品～ 本文8行目

(誤) 領内に^{おびらこうざん}尾平鉾山があり銅が賄える

(正) 領内に^{おびらこうざん}尾平鉾山があり^{すす}錫が賄える